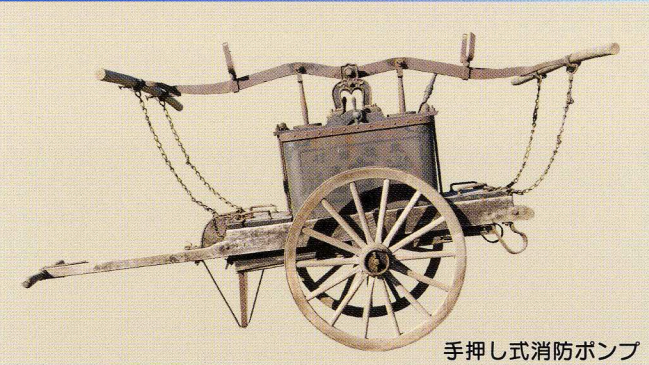




消火道具 手押し式消防ポンプと竜吐水



手押し式消防ポンプ

当館では、毎年5月5日に手押し式消防ポンプの放水体験を行っています。本来、寄贈いただいた資料は大切に保管しますが、子ども達に体験してほしいという寄贈者の依頼により年に一度だけ実際に使用しています。

手押し式消防ポンプは、明治時代にヨーロッパから伝わり、日本全国に広がりしました。その後、消防車が普及する1960年頃まで使用されていました。何人もの男たちが持ち手をシーソーのように漕ぎ、ポンプで水に圧力を加えて一気に放水します。当館が所蔵している消防ポンプは、東植田地区の光吉組という消防団が大正2年(1913)に宇佐市柳ヶ浦の店から購入したものです。今は色が落ちていますが、本来は赤色に裝飾されていたと思われます。

竜吐水(りゅうどすい)

手押し式消防ポンプが伝わる以前、日本では「竜吐水」という木製の手押しポンプを使って消火活動を行っていました。放水する様子が、竜が水を吐く様子に似ていたことからこの名がついたと言われています。江戸時代中頃に登場し、幕府から江戸の町火消しに与えられたことで日本各地に普及しました。ところが、水鉄砲と同じように純粋な腕力によって水を押し出す構造のため、消火能力はそれほど高くなく、飛び火による延焼を防ぐ程度だったようです。木製で手押し式消防ポンプに似た形の大型のものや、一人で持ち運びができる小型のものもありました。



小型の竜吐水

利用案内

- 開館時間 9時から17時(入館は16時30分まで)
- 休館日 月曜日 但し祝日の場合は開館  
但し第1月曜日は開館し、翌火曜日が休館日  
祝日の翌日 但し土・日曜の場合は開館  
年末年始 12月28日～1月4日

- 観覧料 大人200円(団体150円) 高校生100円(団体50円)  
中学生以下 無料 ※団体は20名以上  
※身体障害者手帳・療育手帳・精神障害者保健福祉手帳の交付を受けている方とその介護者は無料。  
◎入館時に受付で手帳を提示してください。

- 交通機関 ・JR久大本線 豊後国分駅下車 徒歩2分  
・大分バス [国分新町ゆき] 歴史資料館入口下車 徒歩5分  
・大分自動車道 大分I.C.光吉I.C.よりともに約15分

発行日：平成25年4月20日

発行：大分市歴史資料館 〒870-0864 大分市大字国分960-1 TEL097-549-0880 Fax097-549-5766

※大分市ホームページの「観光・魅力」>歴史・文化財>歴史・文化を学ぶ>大分市歴史資料館」も併せてご覧下さい。

(http://www.city.oita.oita.jp/)

テーマ展示解説講座

- 内容 講座室でテーマ展示Ⅰ「古文書にみる大友の家臣たち」について、スライドなどで解説した後、展示会場を案内します。
- 日時 5月12日(日) 14時～15時30分
- 参加費 無料 ※事前の申し込みは必要ありません。

ふれあい歴史体験講座

- 定員 各回70名程度(先着順)
- 時間 午前の部 9時30分～(約2時間)  
午後の部 14時00分～(約2時間)

	実施日	内容	時間	材料費	受付開始日
第1回	4月27日(土)	粘土はにわ作り	午前・午後	220円	4月5日(金)
第2回	5月18日(土)	土笛作り	午前・午後	50円	5月6日(月)
第3回	6月8日(土)	勾玉作り	午前・午後	200円	5月19日(日)
第4回	6月15日(土)	土偶作り	午前・午後	170円	6月5日(水)
第5回	7月6日(土)	七夕飾り作り	午前・午後	無料	6月20日(木)

- 応募 上記の受付開始日より、電話にて応募ください。  
(大分市歴史資料館:097-549-0880)

昔のおもちゃで遊ぼう

- 内容 歴史資料館隣の広い史跡公園で、竹馬・竹とんぼ、コマなどの昔のおもちゃで、思い切り遊びます。体験当日は、手押し式消防ポンプ体験を親子みんなで力を合わせて行います。一番力が加わった時は、現在の二階建ての家でも十分とどくほど、すごい勢いで水が放水できます。
- 日時 5月5日(日) 【こどもの日】  
9時30分～16時(15時受付終了)
- 参加費 無料 ※事前の申し込みは必要ありません。

★上記の各講座等の参加者は観覧料が無料になります。



放水体験の様子

# 大分市歴史資料館

OITA CITY HISTORICAL MUSEUM

## ニュース

vol. 103  
2013.4.20

テーマ展示Ⅰ  
古文書にみる大友の家臣たち  
4月20日(土)～6月30日(日)



豊前今井元長船戦図(部分)

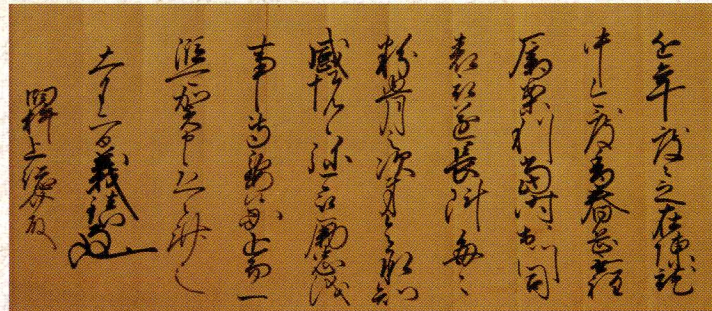


# 「古文書にみる大友の家臣たち」

大友氏が九州の戦国大名の雄として勢力を広げた背景には、歴代当主に仕えた数多くの家臣たちの存在がありました。“三老”と呼ばれた戸次鑑連(道雪)、臼杵鑑速、吉弘鑑理の宗麟の重臣たちをはじめ、右筆や奉行、城督など様々な役割を担った家臣たちが大友氏の治世を支えました。本展示では、そうした大友氏の家臣たちの様相を、当館が所蔵する古文書から紹介します。

## 大友氏の宿老 臼杵氏

大友義鎮(宗麟)が永禄4年(1561)毛利氏との豊前国門司城争奪戦における臼杵上総介鑑榮の戦功を賞した内容の書状です。臼杵氏は、鑑榮の父長景、兄の鑑続、弟の鑑速と、代々大友家の領国支配の中核をなした宿老(加判衆、年寄などとも呼ばれた)を務めています。鑑速は、戸次鑑連、吉弘鑑理とともに“三老”と呼ばれ、宗麟をよく補佐し、毛利氏や龍造寺氏との戦のため豊前・筑前・肥前国方面へたびたび出陣するなど、大友家の全盛時代を築いた功労者の一人といわれています。また、長景は大友水軍で有名な若林氏を被官とし、鑑続は博多を臨む筑前国志摩郡柑子岳の城督を務めるなど、臼杵氏は大友水軍の将として海上の支配にも深く関わっていました。



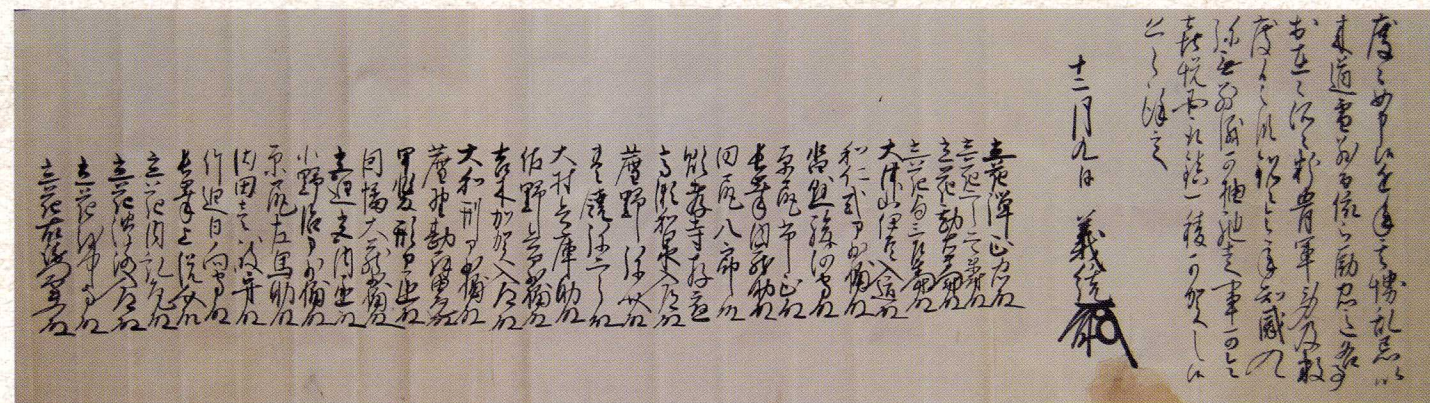
大友義鎮状

## 筑前国立花城督 戸次道雪

大友義統が、戸次道雪配下の立花弾正忠以下31名の主要な家臣たちに対して軍功を賞した書状です。道雪は、元亀2年(1571)宗麟から筑前国立花山西城の城督に任ぜられ、宗麟の宿老を退きます。その後、天正13年(1585)筑後国北野の陣中で亡くなるまで、大友氏の筑前・筑後国方面の経営に力を尽くしました。道雪の娘蘭千代の婿として迎えられた宗茂(高橋紹雲の子)は天正10年頃に「立花」の苗字を名乗り、戸次一門の重臣たちも同12年頃に立花の苗字の使用を許されたといわれています。このことから、本書は天正12年頃のものと考えられ、武勇を誇った道雪の家臣団の状況がうかがえる興味深い内容です。



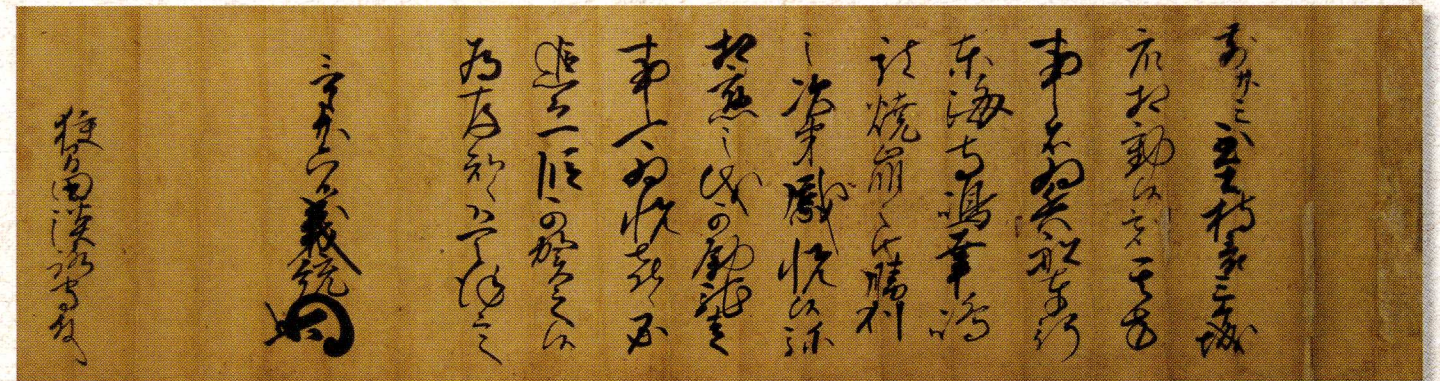
戸次道雪画像(複製) 原品:柳川市福厳寺蔵



大友義統感状

## 大友水軍 狭間田氏

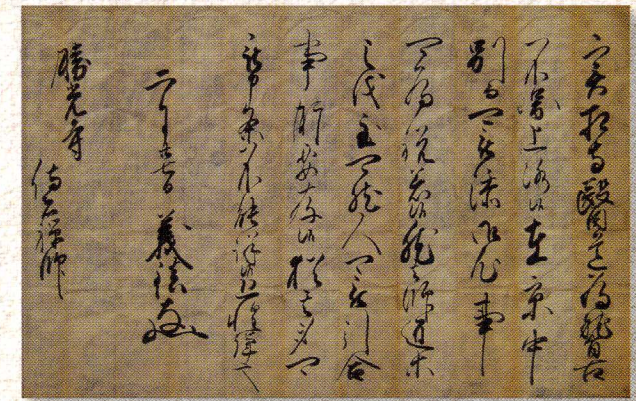
大友義統が天正6年(1578)日向国の土持氏攻めで兵船奉行として戦功をあげた狭間田淡路守を賞した書状です。大友氏の水軍衆としては、佐賀関の若林氏や国東の岐部氏、別府湾岸の渡辺氏・辻間氏などが有名ですが、狭間田氏は大分郡高田荘(大分市)に給地を与えられ、宗麟の代に土佐国的一条氏との連絡のために船を出すなど、大友水軍の一翼を担っていました。



大友義統感状

## 大友氏のお抱え医師 実相寺

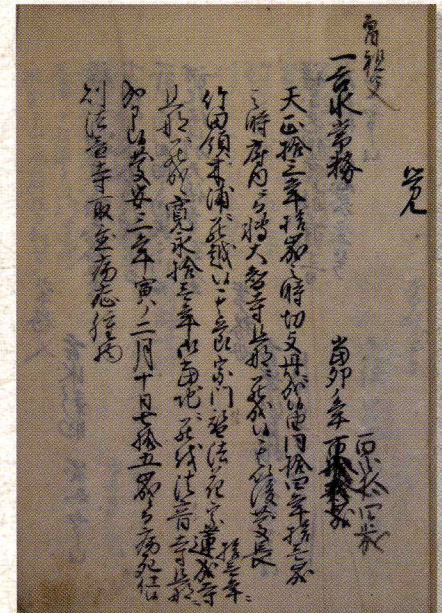
大友義鎮が京都にいる勝光寺住職に対して、医術稽古のため京都へ上った実相寺に適切な師匠を紹介してくれるように依頼した書状です。義鎮の花押の形状から、実相寺の上京は天文22年(1553)~永禄5年(1562)頃に行われたと考えられます。実相寺は、文禄4年(1595)に大友吉統(義統)が大友家で行われていた年中行事の内容を記した「當家年中作法日記」によると、正月朔日の大友氏当主との対面や、同29日の大おもて節の行事の際に他の医者衆とともに大友館へ招かれており、座敷では宿老、間次に次ぐ高い席次が与えられています。



大友義鎮書状

## キリシタンとなった吉水氏

貞享4年(1687)に吉水藤右衛門がキリシタンであった曾祖父吉水常務、およびその類族(親族)17名の旦那寺とその生死の状況を書き上げたものです。本書によると、常務は天正13年(1585)10歳のときにキリシタンとなり、翌14年に棄教して豊後府内の大智寺の旦那になったと記されています。その後、慶長11年(1606)岡藩領の木浦に移り住み、さらに寛永11年(1634)臼杵の法音寺の旦那となって慶安3年(1650)、75歳で病死したとあります。常務の父親の吉水新助は天正6年(1578)日向国高城耳川の合戦で討死、またその旦那寺は禅宗天徳寺と記されています。天徳寺はもと大友宗麟が津久見に設けた教会といわれており、常務の母親(吉岡治部の娘)も同じ天徳寺の旦那寺とあることから、常務がキリシタンとなった背景には父母や、天正6年にキリスト教に改宗した宗麟の影響があったと考えられます。



転并類族之書出

## 表紙紹介 豊前今井元長船戦図(部分)

永禄4年(1561)豊前国門司城の攻撃のために箕島の対岸の今井・元永(福岡県行橋市)に待機させていた大友方の軍船と、これを撃つ毛利方の軍船との海戦を描いた絵図です。村上武吉以下11名の武将に率いられた毛利方は兵船800艘・丸木舟400艘とあり、迎え撃つ大友方は鶴崎・竹原・桑多(奈多カ)の諸氏の率いる兵船300余艘と記されています。なかでも鶴崎氏の旗艦とみられる兵船はひときわ立派に描かれており、同氏が当時大友水軍の中心的存在であったとみられます。この戦は結局、兵船の数でも上回る毛利方の勝利に終わりました。